



中国日本商会

今どきコラムー94

中国雑談

2030年に上海は国際金融のポジションをどう変化するか

上海国際金融センターの今後について、2020年12月17日の『財経』に「中国金融40人フォーラム」による調査結果を載せた。同フォーラムのプロジェクトチームが、中国-欧州連合（EU）商会、米中貿易全国委員会、日本貿易振興機構（JETRO）の3機関の会員に対して匿名のアンケートを行った。日本、米国、EU商会からそれぞれ7、9、14通—合わせて30通の回答があった。同時に、同チームは外資系金融機関に対し10回に及ぶインタビューを行った。上述の情報の分析、クロス検証と総括を経て、上海国際金融センターのこれからを展望した。

現在、香港、シンガポール、上海は東アジア地区の三大国際金融センターである。プロジェクトチームは、在中国外資系金融機関に3都市の国際金融センターとしての位置に序列を聞いた。その結果、2020年は香港、シンガポール、上海の順だった。2030年を展望すると、シンガポール、上海、香港の順に変わると予想している。

具体的に言うと、順番のアンケートから以下の点が明らかになった。2020年、香港、シンガポール、上海の順で平均値は1.6、1.8、2.6（点数が低ければ低いほど地位は高い）。インタビューで明らかになった外資系機関の代表的な見方は次の通り。上海金融市場の多くの規模を示す指標は確かに巨大だが、国際金融センターは国際化の度合いをより強調する必要がある、市場規模だけではない。さらに上海国際金融センターは法律体系、金融市場環境等のソフト面と国際金融市場とのリンク度を向上させる必要がある。資本金口座の自由兌換の不完全性も上海国際金融センターの国際的地位を制限している。



プロジェクトチームは次のように認識している。上述の評価は確かに適切で建設的な見解だが、資本金融口座の開放については全局的な枠組みの中で議論されるべきであり、言い換えると、中国は安全保障、国際政治面から戦略的に考慮しており、外資系金融機関の意見はそもそも理にかなっているとは限らない。

アンケート結果はまた、次のように示している。2030年を予測して、その順はシンガポール、上海、香港となり、その平均値は1.7、1.9、2.3。2020年の順位に比べて、上海、シンガポールは1位に上昇、それに対し香港は低下する。この中で、上海の平均値上昇幅は最大であり、2.6から1.9に上昇している。これは外資系金融機関が上海国際金融センターの長期的な地位を比較的楽観視していることを物語っている。

同時に、外資系機関の予測には意見の相違と共通認識が見られる。中でも、シンガポール国際金融センターの順位には大きな意見の相違がある。シンガポールが2030年も第1位と予測している割合は53%で2020年に比較して13ポイント上昇している。しかし、同時にシンガポールは2030年には第3位になるという予測も27%に達し、2020年比で10ポイント上昇している。

一方、香港と上海の順位の変化についてはかなり強い共通認識がある。中でも、上海の順位が2030年に第1位、第2位と予測している割合はそれぞれ30%、47%であり、2020年の割合（14%、13%）に比べてともに大幅に上昇している。これは外資系金融機関が上海の将来性を楽観視していることを示している。特に上海が2030年に第1位になるという予測が大幅に上昇しているのは、上海国際金融センターに対する強含みの予測が、完全に香港の順位低下の代わりであるとも言えないことを物語っている。

日本企業（中国）研究院 執行院長

chenyan5931@163.com